

旧石器時代遺跡を守り、活かす

—旧石器遺跡へのいざない—

芝 康次郎

都城発掘調査部主任研究員

1. 文化財を守ること

私たちの足元には、過去の人々の暮らした痕跡（遺跡）が眠っている。遺跡の内容を解き明かすことは、私たちやその先祖が辿ってきた道を照らしてくれる。

実際に発掘調査で遺構や遺物を掘り出すと、確かにそこに人がいたのだ、ということを実感することができるし、それらの失敗の様子など人間くさい痕跡を見つけると、あたかもそこに人がいるように錯覚することすらある。それが自分の住んでいる土地ならば、自分たちの先祖かもしれない人たちが確かにそこにいたと感ずることで、土地への愛着が増すこともあるだろうし、さらに「自分たちは何者か」、という根源的な問いにも繋がる。遺跡は、時代や地域によっても様々な「顔」をもっており、まさに文化の表現形と言ってよい。

現代の文化財保護とは、こうした先人が残した（残ってきた）文化財を「我が国の歴史、文化等の理解に欠くことができないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなす」「貴重な国民的財残」（文化財保護法第3・4条）として将来に引き継ぐ、そうした理念に基づくものである。

ここで話題とする遺跡も、文化財の1つである。厳密にいうと「記念物」という類型に属するのだが、その多くは地下に埋蔵されているものなので、「埋蔵文化財」と呼んでいる。行政的な用語なので、ここではより一般的な「遺跡」とよぶ。

2. 遺跡保護と旧石器時代遺跡

（1）旧石器時代遺跡はどのくらいある？

我が国には現在、47万2千か所もの遺跡が知られている（令和3年時点、文化庁文化財第二課『埋蔵文化財関係統計資料』）。地域によってももちろん粗密はあるが、単純化すると都道府県に1万件ずつある計算になる。ただし、人類が日本列島に暮らしはじめて以降の遺跡が合算された数値なので、時代によっても大きく異なる。

一般に古ければ古いほど、遺跡は残存しにくい。時間の経過に伴う遺跡や遺物の劣化、後世の破壊、改変行為等の要因とともに、特に旧石器時代の場合は、ほとんど土地に痕跡を残さないという生活様式も影響している。また地中深くにあるため、未知の遺跡もまだまだ多く潜在しているはずだ。これらを了解した上で、旧石器時代遺跡は我が国には、1万か所強確認されている。この数はどのように評価できるか。

日本列島にはいつヒトがやってきたのか、どのように暮らしていたのか、このことを解き明かすカギは、旧石器時代時代の遺跡の調査、研究を行うことで初めて明らかになる。教科書にも登場するように、1949年（昭和24）に群馬県岩宿遺跡において、我が国での旧石器時代遺跡の存在が初めて確認された。それ以降、これらの命題に数多くの研究者が取り組み、今のところ最も古くかつ確実な年代は、約3.8万年前とされる（最近これを遡るかもしれない遺跡が発見されている）。縄文時代が始まるのが、およそ1.6万年前なので、日本列島人類史の約58%（2.2万年間）

は旧石器時代（厳密には後期旧石器時代）ということになる。当時は移動性の狩猟採集民が列島全域に暮らし、限られた資源環境で生活を維持していくため後世に比べると人口は少なかったと考えられているが、遺跡数の評価に話を戻すと、タイムスケール的には、明らかに旧石器時代遺跡の数は少ないようにみえる。

図上の地図は、後期旧石器時代（最終氷期最寒冷期：2.6～2.2 万年前）の日本列島を示したものである。当時は寒冷化により海面が低下し（現在よりも 120mほど低かったとされる）、植生も大きく異なっていた。日本列島のうち、本州、四国、九州は、津軽半島と対馬海峡を介して大陸と対峙する 1 つの陸塊「古本州島」であり、北海道とサハリンは大陸と繋がって「古サハリンー北海道半島」をなす。南西諸島はこの時にも列島を形成していた。当然ながら今よりも日本列島の面積は大きく、当時の低地は現在海面下に没している。例えば瀬戸内海は当時、陸地化しており、旧石器人たちの主要な回遊ルートになっていた可能性が高い。その証拠に備讃瀬戸の島嶼部には多数の遺跡があるし（瀬戸大橋の建設工事ではたくさんの旧石器遺跡が見つかった）、海からはナウマンゾウの化石骨が多数引き揚げられている。このように、現在とは気候、地形も大きく異なっており、旧石器時代人が暮らした場所（遺跡）の存在を想定するには限界がある。ひとまず、ここでは潜在的には遺跡はもっと多いだろうし、今後あっと驚く遺跡が発見される可能性も十分にあるということを確認しておく。

旧石器時代の調査、研究には、こうしたいくつもの前提を考慮することが必要であり、遺跡の保護の観点でもやはり同様のことを認識しておく必要がある。

（2）指定された旧石器時代遺跡

1 万件以上の旧石器時代遺跡が存在するが、

内容が分かっているものの大半は、発掘調査が行われて消滅、あるいは一部だけが残されているものである。これは、旧石器時代遺跡が地中深くに残されているため、道路建設のような大規模な開発事業に伴う事前発掘調査（緊急調査という）で見つかることが多いためである。こうした代償によって、日本列島の旧石器時代遺跡の内容がかなりの程度明らかになり、研究が深化してきたことも事実である。

一方、将来にあたって保護されることが決まっている遺跡を、「史跡」（より価値が高いものは「特別史跡」）という。国に指定されるには、「我が国の正しい歴史の理解に欠くことができず、かつ遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術上の価値が高いもの」（指定基準、昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会告示第 2 号）ことが要件となる。実は縄文時代草創期を含めても史跡数は 30 か所である。史跡全体の数 1700 件超のうちのわずか 1.7% である。

この大きな理由 1 つが、この時期の遺構の乏しさである。旧石器時代には、縄文時代以降一般化する竪穴建物は基本的に見られない。あるのは、石を組んだ炉跡がせいぜいで、あとは石器作り等によって残された石器の散らばり（専門用語では、石器集中部、ブロックとよぶ）である。これらは旧石器時代人のキャンプ跡と考えられているが、石器を取り上げてしまう（整理室に持って帰ってしまう）と遺跡は消滅したも同然ということになる。

とはいえ、1 万分の 30 というのは少なすぎはしまいか。私は昨年までこの課題に深く関わっていたので、このことを少し取り上げておきたい。

旧石器時代から縄文時代草創期までの史跡を一覧表に掲げた。縄文時代草創期遺跡が 14 か所なので、旧石器時代遺跡とおおよそ半々ということになる。この表は上から下に向かって指定年が古いほうから並べている。



図 旧石器時代・縄文時代草創期の史跡
 (地質図ナビ (<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#5,38,247,145,262>) より作成)

表 旧石器時代から縄文時代草創期の史跡一覧

番号	史 跡 名	所 在 地	指定年	種類	備考
1	嵩山蛇穴	愛知県豊橋市	昭和32年	洞穴	縄文時代の洞穴として指定（草創期遺物出土）。
2	上黒岩岩陰遺跡	愛媛県久万高原町	昭和46年	岩陰	草創期洞穴遺跡。線刻した石偶も出土。
3	国府遺跡	大阪府藤井寺市	昭和49年 令和3年（追）	開地	石器型式及び製作技術の指標となった遺跡。 縄文・古代との複合遺跡。
4	日向洞窟	山形県高畠町	昭和52年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
5	福井洞窟	長崎県佐世保市	昭和53年 平成22年（追） 令和6年（特史）	洞穴	旧石器時代～縄文時代の移行を示す遺跡。
6	不動ガ岩屋洞窟	高知県佐川町	昭和53年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
7	休場遺跡	静岡県沼津市	昭和54年	開地	細石刃とともに石囲い炉検出。
8	岩宿遺跡	群馬県みどり町	昭和54年	開地	大森貝塚、弥生二丁目遺跡と同じ観点の指定。 学史的意義を評価。
9	室谷洞窟	新潟県阿賀町	昭和55年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
10	大立洞窟	山形県高畠町	昭和55年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
11	一の沢洞窟	山形県高畠町	昭和55年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
12	岩戸遺跡	大分県豊後大野市	昭和56年	開地	旧石器とともに岩偶（旧石器初）が出土。
13	直坂遺跡	富山県富山市	昭和56年	開地	旧石器時代の土坑を検出。
14	小瀬ヶ沢洞窟	新潟県阿賀町	昭和57年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
15	火箱岩洞窟	山形県高畠町	昭和58年	洞穴	草創期洞穴遺跡。
16	泉福寺洞窟	長崎県佐世保市	昭和61年	洞穴	旧石器時代～縄文時代の移行を示す遺跡。
17	白滝遺跡群	北海道遠軽町	平成元年 平成9年（追・名）	開地	旧石器時代の黒曜石原産地遺跡。
18	ピリカ遺跡	北海道今金町	平成6年	開地	旧石器時代の頁岩原産地遺跡
19	矢出川遺跡	長野県南牧村	平成7年	開地	細石刃が初めて発見された遺跡。
20	田名向原遺跡	神奈川県相模原市	平成11年	開地	旧石器時代のテント状建物遺構検出。
21	荒屋遺跡	新潟県川口町	平成16年	開地	北方系細石刃石器群とともに土坑を検出。
22	西鹿田中島遺跡	群馬県みどり町	平成16年	開地	縄文時代草創期の生活実態を示す遺跡。
23	大鹿窪遺跡	静岡県富士宮市	平成20年	開地	縄文時代草創期の生活実態を示す遺跡。
24	大平山元遺跡	青森県蟹江町	平成25年	開地	旧石器時代～縄文時代の移行を示す遺跡。
25	墨古沢遺跡	千葉県酒々井町	令和元年	開地	旧石器時代～縄文時代の移行を示す遺跡。
26	本ノ木・田沢遺跡群 本ノ木遺跡 田沢遺跡 壬遺跡	新潟県津南町	令和元年	開地	縄文時代草創期の生活実態を示す遺跡。
27	白保竿根田原洞穴遺跡	沖縄県石垣市	令和2年	洞穴	旧石器時代人骨が出土した埋葬遺跡。
28	鈴木遺跡	東京都小平市	令和2年	開地	列島を代表する旧石器時代の重層遺跡。
29	立切遺跡・横峯遺跡	鹿児島県中種子町・ 南種子町	令和4年	開地	列島の旧石器文化の多様性を示す遺跡。
30	香坂山遺跡	長野県佐久市	令和7年	開地	列島への現生人類の到来の実態を示す遺跡。

森先一貴（2017）によると、以下のように整理できる¹⁾。

①洞穴遺跡を中心とした保護（昭和 30 年代～60 年代）

②開地遺跡の保護（昭和 50 年代以降）

③史跡指定の考え方の変化（平成以降）

こうした遺跡保護の変遷の背景には、当該期の調査研究の動向が大きく作用していたと考えられる。大規模開発時代にあたる①の時期には保護対象が、開発の及ばない洞穴遺跡に限られていた。洞窟、岩陰遺跡のうち、旧石器時代・縄文時代移行期に関係する遺跡の調査研究が飛躍的に進み、その保護が図られた時期とも言える。図下の遺跡分布図に洞窟・岩陰遺跡が多いのはそのためだ。

その後、遺跡調査や研究の多様化が進む中で、まずは遺構が見つかった開地遺跡が中心に指定が進み、次いで石材原産地を背後に置く「原産地遺跡」等にも指定が及ぶようになった。これは調査研究の深化により、当時の生活様式を反映した指定へとシフトした結果と言える。

そして、令和時代に入ってから史跡指定は続いているが、指定の考え方をブラッシュアップしつつ、日本列島の後期旧石器時代の特徴とは何か、という点にも光を当てている。次の最近指定された遺跡の実例を取り上げて、保護の実際を見ていこう。

3. 旧石器時代遺跡保護の実例

（1）墨古沢遺跡（千葉県酒々井町）

例えば、墨古沢遺跡は、日本列島の後期旧石器時代前半期（3.8-3.0 万年前）の遺跡の特徴である「環状ブロック群」が見つかった遺跡である。環状ブロック群とは、複数の石器集中部（ブロック）が、中央部の空閑地を囲んで環状（円形や楕円形）をなす遺跡形態のことだ。1つ1つのブロックが旧石器人たちの生活痕跡で、人々が寄り集まった拠点的な集落と考えられている。東日本を中心に全

国で 142 か所見つかっている²⁾（ちなみに奈良県三郷町の峯ノ阪遺跡もその1つ）。これらは緊急調査で見つかることが多い。

墨古沢遺跡は高速道路パーキングエリア拡張に伴う発掘調査によって、最大級の規模をもつ環状ブロック群の西半分が見つかった。一方、東半分は未発掘であったため、地元の酒々井町教育委員会によって保存のための調査を実施し、令和元年度に史跡指定された。

注目されるのは、遺跡保存のために、出土遺物の大半を基礎データを取得した上で現地保存したことである。これは石器を取り上げてしまうことによる遺跡の保存という課題に対する1つの回答であり、国内では初めての試みであった。この手法はこの10月に指定された香坂山遺跡でも実践されている。

（2）立切遺跡・横峯遺跡（鹿児島県中種子町・南種子町）

日本列島の後期旧石器時代の特徴として、もう一つ上げられるのは、陥し穴（落し穴）である。この種の遺構は、後期旧石器時代全般にわたり 52 遺跡が認められるが³⁾、面白いのは地理的分布で、太平洋沿岸地域に集中するのだ。特に後期旧石器時代前半期にはその傾向が強い。海外では旧石器時代の落し穴の事例は知られておらず、列島に暮らした旧石器人によるユニークな狩猟方法として、きわめて重要と言える。

この最古の事例が立切遺跡である。現生人類が日本列島にやってきて間もない3.5万年前に遡る事例である。神奈川県や静岡県での事例が3.2万年前ごろなので、その古さが際立つ。

この遺跡は種子島の中央部の台地上に位置しており、その緩斜面に落し穴が30基以上見つかっており、やや離れた平坦面に調理場と考えられる「礫群」を備えた居住場所があったようだ。

落し穴は、上から見ると円形となし、断面形は円筒形やラッパ形になるものもある（直

径1 m、深さ 1.5m程度)。シカやイノシシのような中型クラスの動物の狩りに用いられたと考えられるが、実際の獲物が何であったのかは分かっていない。ただ、このような遺跡が、突如として種子島に現れたには理由があるはずだ。

同じ時期の横峯遺跡では落とし穴は見つっていないが、調理場跡と考えられる礫群が数多く見ついている。礫群には木炭が多数含まれ、礫は熱を受けて赤化しているもので、何度も繰り返し利用されたようだ。さらに石器の組合せは、列島のこの時期に通常見られるヤリ先は認められず、植物を磨りつぶすために用いる磨石や台石が主体である。

こうした状況は、ステレオタイプの旧石器時代像とは一線を画する。ふつうイメージするのは、厳しい寒冷環境に置かれた人々がヤリを使って狩りをしながら移動生活を送る、どこか日々を耐え抜くような暮らしの姿ではないだろうか。しかし、立切遺跡や横峯遺跡の状況はそうは見えない。落とし穴を掘るということは待機量であるし、礫群の状況を見ると、かなりの期間滞在していたと考えられる。また石器は、狩りの道具というよりも植物を加工したと考えられる石器が多い。

これは日本列島に暮らした旧石器時代人が、土地々々の環境に適応しながら、生活様式を変えていたということに他ならない。このことが評価されて、立切遺跡・横峯遺跡は両者がセットとして令和4年に史跡指定された。

この多様性という視点は、遺跡を見るうえでとても重要である。旧石器時代だから、～時代だから・・・といった先入観は、目の前の遺跡を冷静に評価することによって見直す機会となる。そのことを教えてくれる遺跡である。

(3) 福井洞窟（長崎県佐世保市）

最後に取り上げるのは、九州島の西端、佐世保市にある洞穴遺跡、福井洞窟である。この遺跡が見つかったのは、昭和10年代に遡

る。地元の郷土史家である松瀬順一さんが、福井稲荷神社の社殿（洞穴内にある小さな祠）改築の際に、土砂から土器や石器を見つけた。その後、自体が大きく動くのは昭和30年代である。松瀬さんらの収集資料が、大学研究者の目に留まり、発掘調査を実施したところ、旧石器時代と考えられてきた細石刃と土器が伴う、つまり縄文時代の始まりが捉えられた遺跡として、大々的に報道された。さらにこの遺跡調査がセンセーショナルだったのは、当時まだ実践例がすくなく、放射性炭素年代測定が実施され、細石刃に土器が伴った層の年代が約1.2万年前、さらに両面加工石器が出土した最下層の年代が約3.1万年前とされたことで、当時の学界に衝撃を与えた³⁾。この成果により、昭和53年に史跡指定された。

福井洞窟の真骨頂は、ここからである。指定後、現地は長らく看板とトレンチの露出展示された「昔ながらの」公開手法がとられていた。露出展示部分は崩壊の恐れもあったため、いったん埋め戻すとともに、新たな史跡整備を進めるため、佐世保市教育委員会が昭和30年代の発掘調査区を再発掘調査した。深さ6 mに及ぶ調査は困難をきわめたが、現在の研究水準による様々な分析（年代分析、古環境分析、堆積学的な検討等）が実施され、過去調査が文字通り、「検証」された。ここでは調査成果を詳述しないが、河川による洞穴の形成、周辺環境の変化（地すべりや落盤等）、そしてそれらと人々の生活の様子、石器の変遷が見事に整理された。

このことが評価され、令和6年に遺跡の国宝ともいえる「特別史跡」に格上げ指定された。奈良県では、平城宮跡、藤原京跡、高松塚古墳、キトラ古墳等、多くの特別史跡があるが、全国で64件しかなく、旧石器時代の特別史跡は初である。再発掘調査が遺跡の再評価につながった好事例といえる。

福井洞窟は、晴れて特別史跡になったわけ

だが、課題がないわけではない。それは、遺跡にたどり着くまでの公共交通機関がほとんどない点であり、遺跡へのアクセスに問題を抱えている。この課題に対応すること、また多くの市民に遺跡の内容を発信するため、佐世保市は市役所支所に併設して「福井洞窟ミュージアム」が令和3年にオープンした。石器好きには垂涎の展示であるとともに、ジオラマや動画を駆使した分かりやすい展示構成になっており、豊富な体験学習やイベントも行われていて、市の担当者のお話では、これま

では想定を超える入館者数があったとのことである。特別史跡に指定され、開館4年目を迎える今年、この機運をどのように維持していくのか注目しておきたい事例である。

4. 旧石器時代遺跡を守り、活かすために

ここまで最近の旧石器時代遺跡の保護のあり方をみてきたが、実際に「守る」という取組は広がりを見せている。一方で、それを市民の皆さんに届ける、「活かす」という取組



写真1 立切遺跡の落とし穴



写真2 横峯遺跡の礫群



写真3 福井洞窟近景



写真4 福井洞窟近景

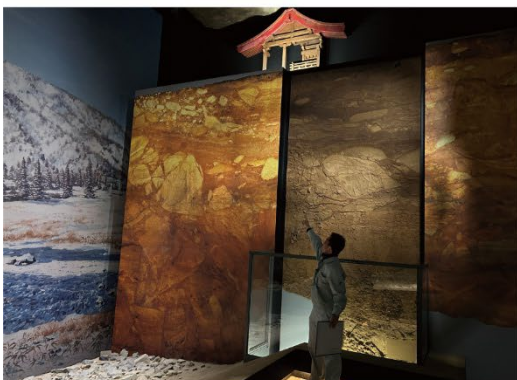


写真5 福井洞窟ミュージアムでのジオラマ

は道半ばと言ってよい。

もちろん福井洞窟のような取組は、日本各地にある。ピリカ旧石器文化館（北海道今金町）、富沢遺跡地底の森ミュージアム（宮城県仙台市）、岩宿遺跡博物館（群馬県みどり市）、田名向原遺跡旧石器学習館（神奈川県相模原市）等、旧石器時代遺跡に特化した博物館において、それぞれの強みを生かした展示が行われている（例えば、地底の森ミュージアムでは狩人がたまに現れるらしい）。

一方で、旧石器時代遺跡の場合、石器の散らばりがメインなので、どうしても遺跡の見え方が単調で、それゆえに見せ方も難しい、という悩みもよく聞えてくる。また、遺物の展示についても石器ばかりになって、説明が小難しくなってしまうという課題もある（石器の説明は専門用語の羅列になりがちだ）。

遺跡自体がそうだから、これは当然といえば当然である。先に述べたように、この時代の環境、生活様式は現代の私たちとはまるで違う。かけ離れすぎていて、想像することすら難しい。けれども、彼らは我々と同じ現生人類「ホモ・サピエンス」である。彼らは間違いなく我々の祖先であり、我が国の文化の先駆者たちだ。彼らの声を掬い上げ、届ける人間の一層の工夫が求められるところである。

さて、企画展のメインをかざっている法華寺南遺跡である。この遺跡の一部は、開発事業に伴う事前調査によって消滅してしまっている。指定等を受けて保護されているわけでもない。遺跡自体をご覧いただくことはできないので、展示では石器を並べ、その説明に労を尽くしている。

石器とともに見ていただきたいのは復元画だ。この遺跡は今は住宅街となっており、現地で遺跡景観をイメージすることはできない。そこで、奈良盆地の当時の景観復元に必要な研究を涉猟し、断片的な石器出土遺跡（実は平城宮跡とその周辺からは旧石器がたくさん

見つかっている）から、当時の景観、集団規模、人の身振り、動物相等の考証を加えた。まさに奈文研の総力？を結集して作った珠玉の作品である（詳しい話は小原研究員の講演にゆずる）。こうした復元画は、研究者が抱えている当時のイメージを、絵を通して多くの人に届けるという意味で、「活かす」ツールになりうる。

ぜひ皆さんには、本展覧会を通して旧石器時代遺跡のイメージを膨らませていただければと思う。

註

- 1) 森先一貴 2017「旧石器時代から縄文時代草創期遺跡の保護」『月刊文化財』平成 29 年 7 号。
- 2) 酒井弘志 2025『墨古沢遺跡』同成社。
- 3) Sato,H 2015 Trap-Pit Hunting in Late Pleistocene Japan. In *Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia*, 389-405.
- 4) 上段の経緯を含め、以下の文献に詳しい記載がある。柳田裕三 2024『旧石器文化から縄文文化へ 福井洞窟』新泉社